

「地方創生」をDEFで考える

企業経営漫談士 岡野実空

「地方創生」とは、地方の人口減少に歯止めをかけ、日本全体の活力を高める、第2次安倍政権の地域振興策。首都圏一極集中の是正が目的なら、なぜまた東京でオリンピックを？という素朴な疑問はさておき、長野県北東に位置する、栗と北斎と花の町、小布施を舞台に、その成功ポイントを、デザイン、エンジニアリング、ファイナンスのDEF視点で考えてみます。

視点D:デザイン(造形)

北国街道の要衝にあり、古くから商業で栄えた小布施は、これまで地域や事業のデザイナーに恵まれました。葛飾北斎のパトロンで、画家としても名高い高井鴻山はその代表です。また名産の栗は、起源には諸説あるものの、酸性の土地に合う食用植物として室町時代から栽培され、江戸時代には和菓子として珍重される一方で、建築用木材にも活用されるなど、長く地域経済を支える一端を担ってきました。

因みに現在の隆盛は、高井鴻山(市村三九郎)を第12代祖先にもつ、16代市村郁夫氏が町長を務めていた1976年の「北斎館」開館が端緒。日本列島改造という文化破壊時代に、「外観は皆のもの、室内は自分のもの」というコンセプトで、「江戸の風景」を修復する「修景」事業は独自の存在感を放ち、多くの賛同者を得て、その造語とともに各地に広がり、いくつかの「小江戸」が再現されるまでになりました。

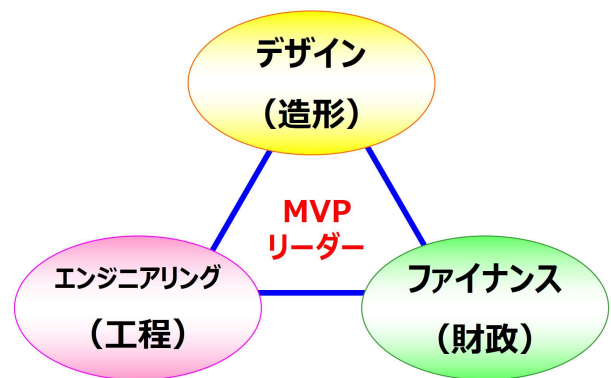
視点E:エンジニアリング(工程)

17代市村次夫氏が16代の遺志を継ぐ町に、セーラ・マリ・カミングスというアメリカ生まれの「台風娘」がやってきたのは1994年。そこから「修景」事業は一気に加速しました。酒蔵や飲食施設の修復、増設や商業集積などのハード面に加え、「国際北斎会議」や「小布施セッション」など多くのイベントを絡めたソフト面の充実が相乗効果を発揮し、その知名度上昇に伴って、多くの「わか者」「よそ者」が「バカ者」セーラの助っ人に現れました。当時、彼女は「町おこし」の「立役者」として雑誌やテレビで盛んに取り上げられましたが、コンセプトは地域のリーダーたちが出し、実務は各専門家や集まった若者たちが請け負いましたので、町おこしの「工程」を劇的に加速した「触媒」の役割をより高く評価すべきだと思います。

視点F:ファイナンス(財政)

そして忘れてはならないのは、暴走がちな彼女を資金面から巧みに制御した17代当主と役員、それを後援した金融機関の存在。バブルの後遺症に苦しみ合併を重ねていた当時の都銀とは違い、地域にしっかり根を下ろし、その土地ならではのビジネスを支える

KM E-23 地域振興のDEF



地銀や信金の存在意義を実感したのは、小布施を定点観測できたおかげです。また豊かな「現金」を生む「観光」事業の魅力と、2次産業～1次産業への大きな「遡上効果」に目を見張り、地域振興の核となる「6次産業化」(1次発ばかりでなく3次産業発も含め)の成功ポイントを深く理解できたのも、当時の小布施に於いてでした。

政府「地方創生」の「まち、ひと、しごと」のスローガンでは、どんな町を、誰が、どのように実現する、のか具体的にイメージできません。その意味で小布施町は、コラム(0-11)で取上げた故平尾誠二氏の遺言「MVP」(ミッション、ビジョン、パッション)を住民と外部の関係者が共有、「DEF」(デザイン、エンジニアリング、ファイナンス)に分解して、関わる人々の巧みな連携で実現した地域振興のお手本です。

かつて小布施をご案内した、慶応大学・樋口美雄師曰く、「世界的にみて、地域振興はリーダー問題なり」と。「DEF」はアメリカで「ヤバイ(カッコいい)」という俗語。小布施は皆さん MVP で DEF (ヤバイ)!

平成 29 年 5 月 8 日 実空